

目標の進捗状況報告書

(2012年度・大学)

担当部局は ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本シートでの自己点検・評価を行う部局と項目・要素は次のとおりである。

対象部局	文学研究科
大項目	6 教育内容・方法・成果 (研究科)
中項目	6.3 教育方法
小項目	6.3.1 教育方法および学習指導は適切か。
要素	教育目標の達成に向けた授業形態(講義・演習・実験等)の採用 履修科目登録の上限設定、学習指導の充実 学生の主体的参加を促す授業方法 研究指導計画に基づく研究指導・学位論文作成指導(院) 実務的能力の向上を目指した教育方法と学習指導(専院)
小項目	6.3.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。
要素	シラバスの作成と内容の充実 授業内容・方法とシラバスとの整合性
小項目	6.3.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。
要素	厳格な成績評価(評価方法・評価基準の明示) 単位制度の趣旨に基づく単位認定の適切性 既修得単位認定の適切性
小項目	6.3.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。
要素	授業の内容および方法の改善を図るための組織的研修・研究の実施

II. 目標の進捗評価と進捗状況報告(2012.4.30現在の進捗状況報告)

《進捗評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況の自己評価を行っている。

進捗評価はA、B、C、Dの4段階とし、2012年4月30日現在における目標の達成度評価(2013年度の達成に対してどこまで進んだかの評価)を行った。A、B、C、D評価は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 前期課程における教育職員専修免許取得等や高度専門職志望者に対応した探究型の教育方法の開発を進める。	→従来の大学院における教育方法に加えて、高度専門職志望者に対応した教育方法の試行・検討・普及の進捗状況。	C	C	C		
2. 後期課程(一部前期課程を含む)における外国語による研究発表支援のための教育方法上の工夫、体制の構築を行う。	→外国語による研究発表を想定した教育方法やスタッフ確保などの支援制度開発の進捗状況。	A	B	B		
3. 大学院教育にふさわしいシラバスのあり方を検討し、改善を進める。	→大学院教育の目標にみあったシラバスのあり方の試行・検討・普及の進捗状況。	C	C	C		
4. 修士論文・博士論文執筆にむけた見通しを持ちうる履修・研究計画作成のための支援策を開発する。	→大学院生が論文執筆までの見通しをもった研究計画を策定し、各年度の実施状況の自己点検・自己評価をなすような年次計画書・報告書開発の進捗状況。	B	B	B		
		☆				
2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況》

目標の進捗状況について次のとおり簡単に説明する。

目標1	専修免許希望者や高度専門職志望者の割合が領域ごとに大きく異なる本研究科の特質をふまえて、新たな教育方法開発の大前提となる、在学生の進路志望と修了者の進路状況の分析を各領域を単位に行っている。また、比較的ニーズの高かった教育心理学・学校教育学分野に関しては、臨床発達心理士資格のための必修科目を新たに設けて、高度専門職志望者向けの新たな教育方法を試行・検討している。
目標2	英語英米文学領域・フランス文学フランス語学領域・ドイツ文学ドイツ語学領域でネイティブ教員を専任で配置し、実際に指導に着手している。心理学領域では、2009年度からの大学院GP「英語プレゼンテーション指導プログラム」が2011年度末に終了し、一定の成果を上げた。また、海外学会発表渡航費補助や外国語投稿論文校閲料補助、外国語要旨校閲料補助などの、既存の研究支援制度を一層充実させ、制度がより効果的かつ公平に利用されるよう、検討を行っている。
☆ 目標3	全学仕様のオンライン・シラバスを作成・公開している。また、大学院生を対象にした独自の授業評価アンケートを学期ごとに実施し、その結果を研究科委員会に報告することで、全体での検討材料に提供している。現状では、シラバスに関する学生の満足度は悪くない。性格を異にする学問領域が混在する本研究科では、各領域ごとにその特性をふまえたシラバスを検討する必要があり、さらには、演習系科目とそれ以外とでは記載要件を大幅に改変する必要があること等の点から、統一的フォーマットとしては成案に至っていない。
目標4	前期課程入試時や後期課程進学時に研究計画書や博士論文計画書の提出を義務づけ、その審査内容をふまえて、「研究演習」「特別研究」「博士論文作成演習」等で学生に応じた指導を行っている。また、後期課程研究奨励金や大学院奨励研究員、学術振興会特別研究員等の競争的資金に積極的に応募させることによって、教員の指導を受けつつ、学生自らが論文執筆に向けての研究計画を自覚化できるようにしている。
備考	